

2018 年 7 月 14 日

第二土曜会
～医療相談/地方創生～（多賀）

江戸時代から、400 年。日本の主要な機能は東京に集積してきた。昨今の近代化、マスメディアの台頭により東京に“集まって地方に拡散していく”中央集権型の人間的な活動が行われてきた。しかし、地方の経済活動の衰退を背景に地方創生の必要性が叫ばれており、中央政府の指針としても取り組まれている。

茨城県は地方創生の文脈にて特別な意味を持つ県の 1 つである。それは県南と県北で戦略が全く違うからである。魅力度ランキングが最下位の茨城県。しかしつくば市、守谷市は住みやすい街ランキングの常連。県南は人口が増えているが、県北は人口が減少し続ける。茨城県県南は地方というには都心に近すぎる（電車でも車でも 30－40 分程度しかかからない）ので郊外といった方がしっくりくるかもしれない。県北は常磐線こそあるが、車では約 1 時間半～2 時間かかるため足取りも重い。県南の経済発展を支えるためには東京で活動を行う人々を加味しなくてはならないが、水戸にはそれが無い。茨城県内でも地方創生という文脈が微妙に異なるのである。

登壇者が住んでいる場所がつくば市であるため、今回はつくば市からみる地方創生について議論をする。

1963 年につくば市の研究学園都市としての発展が閣議決定した。以降学術都市として機能している。200 以上の研究関連施設があるため、知的な活動が文化を形成している。研究に携わる人口が市の人口（23 万人）の 10%にものぼり、アカデミアを背景に持つベンチャーが数多く起業されている。TX つくばエクスプレス沿線の小中高校には親が研究に携わる生徒が多いため、学力ベースラインが高い。地方創生の戦略としては“学術資源”を活かすべきである。しかしその活動が行われているかと言われれば微妙である。つくば市副市長は「研究をビジネスに変える人が少ない」との見解である。

つくば市はまだ恵まれている方であるかもしれない。“資源”があるからである。インフラ面でも 1 時間かからずに秋葉原へ出られる利点もあるため、都心へのアクセスが非常に容易である。

研究学園都市であるつくば市は今後どのように発展していくべきか？

□つくば市の利点

- ・都心へのアクセスが充実（TX、高速バス）
- ・アカデミア人材が豊富
- ・自然が豊富である
- ・学力のベースラインが高い
- ・研究機関が多い
- ・国籍が多様な市民（140 か国籍）

□つくば市の欠点

- ・北（TX 沿線）と南（非 TX 沿線）で学力ベースラインが異なる
- ・移住者、定住者は多いが労働力の流失が多い
- ・総合大学からつくば市に就職するものが極端に少ない
- ・

■地方の特徴

- ・ビジネスの多様性の少なさ
- ・高齢化・人口減少
- ・インフラが行き届いていない
- ・オフラインの情報交換量の少なさ
- ・労働力の流出

■都心特徴

- ・継承されていく文化の少なさ
- ・アデンティティの欠如
- ・人工的・非人工的自然生態系の欠如
- ・1 次産業との距離
- ・高い人口密度（捉え方によっては）

進行

- 1 地方と都心の特徴をブレスト
2. つくば市の発展はどの様に行うべきか？
3. 日本の地方は甦る必要があるのか？
4. 必要があるのであればどんな戦略が必要か？
5. 都心の機能は 10 年後にどの様に移り変わっていくのか？